夢通信

第６号（2017／9／5）

住民流福祉総合研究所（木原孝久）
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476－1
http://juminryu.web.fc2.com/

ご近所発・助けられ上手・支え合いマップ

数々の新発想を発信し続けて４０数年

４４０号をもって終了。ありがとうございました。

❶「住民流」が関係者の間でも流通

すでにお知らせしていた通り、本号をもって月刊誌「住民流福祉」は終了となります。長い間ご愛読して下さった皆様には、深く感謝申し上げます。

第一号が発行されたのは１９７４年、当初は「福祉教育」というタイトルでした。それから四十数年、最終回は通巻４４０号となります。

「住民流福祉」という名称に、馴染めなさを感じる向きもあったようですが、私どもは結局、これにこだわり続けました。

住民流福祉総合研究所という肩書で、国の委員会にも参画、ラジオテレビでも

巻頭インタビュー

今だからこそ住民流福祉

木原 孝久さん　住民流福祉総合研究所　所長

今、地域の特性に応じた地域の福祉力を高めていくことが求められ、地域住民が主体となった支え合い活動が改めて注目されています。住民同士が支え合う社会を広げるためにはどうしたらよいか、40年以上にわたり住民流の福祉のあり方を追い求めている木原孝久さんにお話を伺いま

きはら・たかひさ

早稲田大学第一政治経済学部政治学科卒業。
救護施設、立川図書館、福祉・医療の編集記者、中央共同募金会を経て現職。地域の実態把握の手段として『支え合いマップ』づくりを発案。セミナーや住民座談会などでその成果を伝え、実践指導のため全国を駆け巡っている。著書に『支え合いマップづくり入門』『ご近所パワーで助け合い起こし』『住民流福祉の発見』『福祉の人間学入門』『ボランティア・セラピー』他。

―「住民流
とでしょう
どのような

大学を卒
日常生活が
に関わって
設が近隣住
感じること
入所者と外
たちの冷た
んな経験か
ってもらわ
ミニコミ誌
る「福祉教

埼玉県社協の福祉広報「SAI」

できる限りこの肩書きで通してきました。全国各地でも無論この肩書きで講演の講師を務めてきました。今では、福祉機関から講演依頼を受ける際、タイトルに「住民流福祉」を入れるよう指定されることも多く、住民流福祉はかなり定着してきたようにも感じます。

住民は独特の流儀で助け合っていることを発見しましたが、特に後で紹介する「ご近所」という圏域では、この流儀が行き渡っていて、これを尊重しなければ住民と一緒に福祉に取り組むことはできないと言えるほどです。

❷マップが地域の実態把握のツールとして定着

この４０数年で私どもが発案し、普及させてきた企画は、かなりの数にのぼりますが、その筆頭は「支え合いマップづくり」です。マップづくりを初めて実践したのは今から２３年前で、今では地域の実態把握のツールとして定着した感があります。

大阪自彊館ベラミ等主催のセミナーから

国の広報としてあのレスリングの金メダリストが支え合いマップ作りの実演をする風景は、全国のテレビで何度も放映されました。その後もマップ作りに取り組む団体・機関の数は増え続けています。孤立死が頻発し、無縁社会が話題にな

った頃には、NHKテレビ他各社でも取り上げられました。

政府広報

❸「助けられ上手」が日本語に！

「助けられ上手」という発想も日本の社会に根付いてきたようです。先日も私どもが発掘した助けられ上手さんが、私と一緒にテレビに登場、視聴者に感銘を与えました。この頃では福祉関連の講師を担当する人も、話の中に「助けられ上手」を盛り込んでいるようです。これにいち早く着目したのはマスコミで、大手新聞社はすべてこれを特集しました。

富山テレビ

私どももこの発想の普及に手を貸そうと、「助けられ上手になるために」というパワーポイントのデータを希望する関係者に無償で配布しています。かなりの地域でこのパワーポイントが使われているはずです。

正直に言えば「助けられ上手」という言葉は、あまり普及しそうにない発想だとは思っていたのですが、意外なことに、これがそのまま全国で使われるようになり、今では一つの日本語として定着してしまいました。大学の試験問題にも出題されたことがあります。いずれ国語辞典にも取り入れられるかもしれません。

❹新しい圏域ー「ご近所」を発見

ところで支え合いマップは「ご近所」で実施します。マップ作りで「ご近所」を発見したのです。私たちはどこで助け合っているのか。その時、漠然と「ご近所」という圏域を思い浮かべますが、この「ご近所」が実在していたのです。およそ５０世帯。ここが「顔が見える」範囲であり、「助け合いのベストの圏域」だったのです。

これまで福祉関係者も一般住民も、ただ何となく「地域で」活動をしていたのですが、じつは地域はいくつかの圏域でできているのです。第一の層が市町村。次いで二層が地区・校区。第三層が自治区（町内会のある所）。関係者はここまでしか認知していませんが、私どもはその先に第四層の「ご近所」があると主張してきました。

読売新聞

ここは極めて重要な圏域です。当事者はここに住んでいて、身心の状況により、ここから出るのは大変です。従って足元の人たちの力を得て自立生活をしているのです。彼らが望んでいるのは、当然のことながらご近所福祉を真っ先に充実させることです。ところが関係者は、第一層に拠点を置いて、そこで推進体制を作り、ニーズを推測し、サービスを作り、担い手を集め、そのサービスを受けたい人は第一層まで来るようにと言っているのです。当然のことながら、担い手はなかなか集まらず、当事者もここまでは来ません。

こういうやり方がずっと続いてきましたが、最近、ようやく私どもの考え方に近づいてきています。当事者がいるご近所から福祉を始めるべきなのは当然で、しかもここに世話焼きさんという人材も集中しているのです。

というわけで、今の地域福祉を完全に引っ繰り返す文字通りの逆転の発想を提示して、数十年になりますが、ようやく「ご近所」にも関心が持たれるようになりました。全国各地でご近所福祉活動発表大会が開かれ、私どもが依頼される講演のテーマで最も多いのが「ご近所パワーで助け合い起こし」なのです。

先ほど「世話焼きさん」という言葉を使いましたが、この言葉を福祉の世界で使い始めたのも私たちです。本誌をはじめとして様々な機会を生かして、この数十年、言い続けてきました。国の委員会などで世話焼きさんという言葉を持ち出しても、初めは相手にされませんでしたが、繰り返しているうちに、耳を傾けてくれるようになりました。

❺民生委員をミッドフィルダーに

ご近所が地域福祉の最重要圏域だとして、ここを誰がどこから支援するのか。そこで私たちは民生委員に着目しました。彼らは唯一ご近所に行って、世話焼きさんや要援護者とじかに接している存在です。ご近所を支援するにはうってつけの人材です。そしてご近所では難しい問題は、上層の校区や市町村の関係者に伝達すればいいことです。地域福祉の各層を繋げるのは、この民生委員だったのです。そこでいくつかの地区で、民生委員をミッドフィルダーとして、ネットワーカーの役割を果たしてもらったらどうなるのかモデル実験してみました。

最近誕生した生活支援コーディネーターは民生委員に近づいています。これで地域は全部つながったことになります。

民生委員制度は百周年を迎えましたが、これを記念して「活動強化方策」が全国民児連の手でまとめられました、その中にもこの発想が取り入れられています。

さすがに「ミッドフィルダー」とは言いませんが、「多様な関係者をつなぐ結節点（ハブ）」と言っています。以下の通りです。

「住民が抱える課題が多様化・複雑化する中にあって、地域に存在する多様な関係者・関係機関による包括的な支援を実現するために、その連携の中核たる『結節点=ハブ』となること」。

民生委員制度創設 100 周年活動強化方策

支えあう 住みよい社会 地域から

平成 29 年 7 月

全国民生委員児童委員連合会

全国民生委員児童委員連合会発行

私どもの場合、民生委員のハブの役割を、地域全域、しかもすべての関係者を相手にするのでなく、ご近所という第四層を支える第三層に限定しています。第四層と第三層のつなげ屋です。むろん第二層や第一層ともつながりますが、基本は第四層のバックアップと、第三層とのつなげ屋です。

❻助け合いを阻む日本人のおつき合いの慣行

この数年、私の講演の中で必ず取り上げるものがあります。「あなたのおつき合いの流儀は？」というもので、「我が家の問題をまわりにオープンにしたくない」といったことを１０項目並べて、参加者に〇×をつけてもらうのです。ここでわかったのは、今の日本人のおつき合いは、助け合いをしない前提で成り立っているということです。これではどうしようもありません。

年間数十回も講演等でこの話をしているのですが、みなさん、ショックを受けるようです。何しろ大抵の人は、ほとんどの項目に〇がついてしまうのですから。つまり、助け合いはしたくないと言っているのです。

残念ながらまだ、皆さんに衝撃を与えるにとどまっていますが、ともかくも私

たちのおつき合いの文化を助け合い拒否型から転換しないことには始まらないということを理解していただくところまでは到達したわけです。

❶我が家の問題を周りに打ち明けよう。
❷自分のことを敢えて噂話のタネにしてもらおう。
❸困ったら、思い切って「助けて！」と叫ぼう。
❹助けてもらうために、迷惑かけ上手になろう。
❺人助けをしたければ、詮索の鬼になれ。
❻「口が堅い」のも、よしあしだ。
❼お節介こそが、本当の思いやり。
❽引きこもりの人を救いたければ、こじ開けよう。
❾プライバシーを尊重していては、相手を助けられない。
❿助け合いたいのなら、お互いの家をひらき合おう。

ここに紹介したのは、日本人のおつき合いをこのように転換しようと提示したものです。助け合いの社会になるために、こんな大きなハードルがあったのです。

❼「自己実現」を見える化した一豊かさダイヤグラム

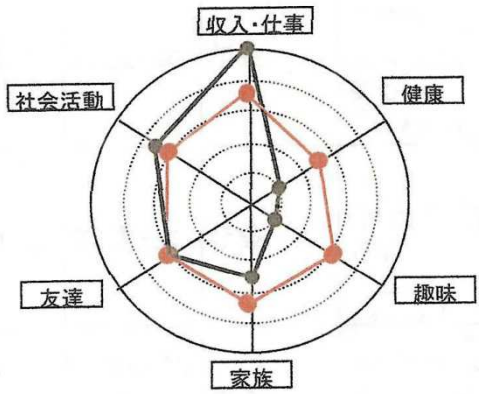
住民を含めて福祉に関わる人たちが要援護者に保障すべきことといえば①安全の保持、②困り事の解決、③介護・ケアの三つですが、厚労省は数十年も前から、これにもう一つ、付け加えていました。「どんなに重い要介護でも、安全を守るだけでなく、その人らしい人生を送らせてあげること」。農家として８０年も生きてきた人にとっては、畑がすべてでしょう。ならば寝たきりになっても、畑に連れて行ってあげようというのです。

「その人らしく」とは、いわばその人の自己実現を手助けしようということでしょう。しかしこれではわかりづらい。そこで私どもでは、豊かさのダイヤグラムを開発しました。六角形を描き、そこに六つの豊かさのための要件を配置しただ

けです。①仕事・収入、②健康、③趣味、④家族・夫婦、⑤ふれあい、⑥ボランティア。たったこれだけのものですが、これにその人の現状を乗せ、これを基に六角形を満開にする方法を考えるのです。こうすることで、自己実現という漠然とした概念が、具体的な目標として迫ってきます。既にＮＨＫテレビでは、過去に数回、私が解説しました。視聴者には大変好評でした。

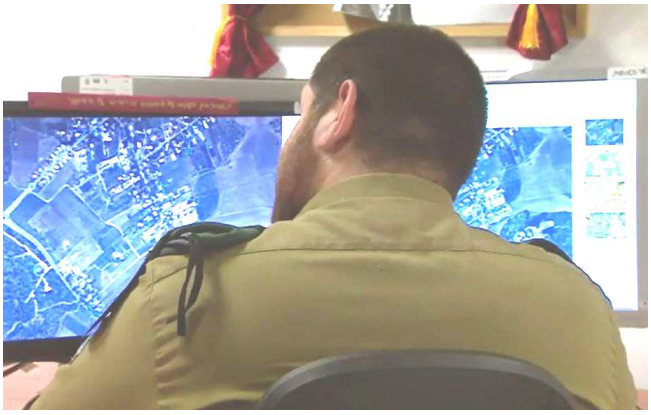
これを要援護者への訪問活動に生かしている民生委員もいます。今まではただ「元気？」としか言うことがなかったのに、ダイヤグラムをもって訪問したら、「話題が六倍に広がった」と喜んでいます。

豊かさダイヤグラムを活用している民生委員の報告会（滑川市社会福祉協議会）



❽「障害は才能だ」ーは、いまだ途上に

その他にも、全国に普及するまでは至らないけれど、月刊誌を通して、繰り返し発信し続けてきた発想もたくさんあります。例えば「障害は才能だ」。今の社会は、障害児者はただハンディを抱えているだけの人と見られていましたが、じつはその障害は裏返せば才能なのだという発想が一部で広がっており、本誌ではこれは極めて重要な発想だとして、繰り返し取り上げてきました。最近では、障害者というのはなくて、例えば自閉症の場合は脳の構造が一般人と異なるだけであって、それぞれに得意な部分と不得意な部分があるという考えに至っています。変な言い方ですが、人種が違うに過ぎない、というわけです。本号でもこれを取り上げています。



イスラエル軍で航空写真の分析を行う自閉症の兵士
（BBCニュース映像）

❾「フェアネス」は日本人には馴染めない？

同じく障害関連では「フェアネス」という発想を、本誌では数十年も提唱していますが、期待したほどには広がっていません。日本人の風土とも関係しているようで、今の日本人は、ハンディを抱えた人に特別なハンディをつけてあげようという気はないようです。日本人が好きなのはあくまで「平等」です。

これまで按摩マッサージの仕事は視力障害者に特別に有利にということで、養成機関は視力障害者に限っていましたが、今ではこの制度を維持することが難しくなってきたようです。「職業選択の自由」という憲法の「錦の御旗」の前に、引き下がるより仕方がなくなりました。

この二つの発想が福祉の世界でも取り入れられるようになれば、俄然状況は一変します。障害者の置かれた立場が改善されるだけではありません。

❿要援護者ほど担い手になりたい―ヘルパーセラピー

この発想も何十年、主張し続けていますが、なかなか日本社会ではブレイクしません。要援護者は大人しくサービスを受けていればいいという考え方が住民から関係者まで、頑固に根付いてしまっています。

実際にその事例を示せば、少しは納得していただけるのですが。その貴重な事例が、以下の写真です。マップを作っていたら、その地区を毎日徘徊している女

認知症の山脇さなえさんが生け花指導（右端。福岡県福津市東福間のおひなさま祭りで）

性がいた。歩きながら何をしているかと聞くと、人の家の玄関先の生け花などを「手直ししている」のだと。理由を聞いたら、彼女は元生け花の先生だった。ならば地域で生け花教室を開いて、彼女に先生になってもらったらどうかと言ったら、地元のグループが早速、実行したのです。この後、地元ではこの話が話題になったそうです。

この発想が広がらないのは、要するに福祉では担い手と受け手を簡単に区分けするべきではないという主張は、ちょっと受け入れ難いということでしょう。そういう柔軟な発想がなかなか広がらないのは、分別癖のある日本人だからかもしれません。物事を何でも分別するのではなく、むしろ統合的に考えようと本研究所は主張しているのですが、これは難しいかもしれません。

４０年を振り返ってースタッフ鼎談

“発想屋”の悲哀

本誌の発行に携わった者たちで、この４０年を振り返って、鼎談形式でその内容をご紹介することにした。４０年間言えなかったことも、この際言い残しておきたいということも含めてある。

良くも悪くも発想誌だった

Ａ　こういうことを今の段階で打ち明けるというのもなんだと思うけど、最終回だからこそ読者に謝罪しておきたいと思うんだよね。それは、本誌は、いわゆる「月刊誌」とは異なっていたということ。月刊誌という以上、読者が期待するのは、情報だろう。中身は別として、とにかく新情報で占められるのが「月刊誌」だ。ところが、本誌にはそういうものは、たいしてない。あるのは発想だ。

Ｂ　そうだ。我々は今の福祉に変わる新しい福祉のあり方を模索していた。その摸索の過程で思いついた新しい発想を、その時々の月刊誌に掲載していた。情報を後回しにして、発想の提示が前面に出てしまったのは、我々からしたら必然の流れだったが、読者は迷惑したのではないか。

Ｃ　それだけではない。発想の提示にも意味があるとは言え、同じような発想が何度も出てくる。読者からしたら、いつも同じような話をしているではないかと不満に思ったと思うよ。

発想は日々少しずつ成長している

Ａ　たしかにそうだろうね。しかし発想というものは、ある日突然に、しかも完全な姿で閃くというものではないんだよ。ちょうど植物の芽が出て、一日一日少

しずつ伸びていくというのと同じだ。だから月刊誌に、その時点その時点での成長段階で発表しているから、一見同じような発想を毎回載せているようでいて、じつは違うのだ。いや、そうではなく、きちんと成長を終わって、実がなった段階で発表すればいいではないかと言われるが、なかなかそうはいかない。その時々の成長の姿を月刊誌に載せている中で、つまり原稿を書いていることで、また数センチ伸びることもある。あるいは出来上がった記事を何度も読み直している間に、さらに新しい成長の角度が見つかることもある。

Ｂ　一つの発想が、どのようにして芽が出て、成長し、果実をつけるのか、そのプロセスを、月刊誌を継続して講読することで、我々と一緒に体験することができるはずなのだが、そんなことを読者に押し付けることは不遜だよね。

発想を我々と一緒に楽しむ人も

Ｃ　言ってみれば我々は、本誌という畑を使って、いろいろな発想を生み出す作業をしてきた。それに付き合わされた読者は、えらい迷惑だったかもしれない。

Ａ　迷惑と思った人は、購読をやめていたかもしれない。読者からの手紙を読むと、情報というよりは、発想を楽しんでいる人が多いように思う。職場で講読しているが、自分の部署に回ってくるまでに時間がかかるし、もっと自宅に帰ってからじっくり読みたいので、個人として講読したいと言ってくる人が少なくなかった。

Ｂ　全体の一部かもしれないが、我々の打ち出す発想と完全に波長が合って、毎号を楽しみにしてくれている人もいたね。今は私どもの提示した情報や発想のすべてをホームページで公開している。６０種類の小冊子もすべて自由にダウンロードができるのだが、そのほとんどをプリントアウトしてしまったという人もいる。全く魅力を感じない人もいる一方で、こんなご馳走をいただかなければ損だとばかりに活用してくれている人もいる。

Ｃ　たしかに、今の福祉に飽き足らず、本物の福祉を追い求めている人にとっては、貴重な選択肢だと思ってもらえたのかもしれない。

発想屋としての妙味と悲哀

Ａ　我々がやってきたのはそういう意味では「発想屋」という仕事と言えるかもしれない。発想屋の妙味もあるにはあるが、苦しみも多い。一つの発想を思いつくと、初めの段階では、それを社会に提示しても全く反応がない。そして最初の反応は、拒絶、反発だ。数十年前に「助けられ上手」という発想を福祉関係者に提示したら猛反発を食らった。「助けられ上手なんて、当事者を惨めにするような発想は許せん！」と吊るし上げを食ったこともある。その後どこかのルートからマスコミの目に触れたら、俄然注目されることになった。

Ｂ　まずは日経新聞が私の原稿を乗せてくれた。その後他紙も追随。マスコミの大部分がいろいろな角度から取材してくれて、とうとう「助けられ上手」は、今では普通名詞のようになった。つまり、この発想を我々と関連付けて紹介されることがなくなった。最近、福祉関連の講師の人たちは、講義の中に助けられ上手を盛り込んでいる。それはそれでいいのだが、気になるのはこの本当の意味を理解しないままに講じていることだ。

　支え合いマップもそうだ。我々が考え出したのが、今から２０数年前。今では地域の実態把握のツールとして確実に広がっているが、突然政府広報でテレビに出てきたのにはびっくりした。既にマップは、国民の共有財産になっているわけだ。

Ｃ　自分たちが生み出した発想が、社会全般に広がるにつれて、我々の手元から去ってしまう。いいことではあるが、一抹の寂しさを感じる。それが発想屋の宿命なんだろうね。発想の成長期は、どちらかというと反発や拒絶反応があるが、それ以上に普及すると、反発はない代わりに、我々の子どもではなくなる。

本当の理解者がなかなか出現しない

Ａ　発想が普及したとは言うが、残念ながらその本当の理解者は少ない。住民流福祉を講じてもらってもいいと思われる人は、まだ我々の知る限りではいない。支え合いマップ作りを講師レベルで実演できる人も皆無だ。もしかしたらこれか

らも、そういう人は出てこないのではという心配もある。
Ｂ　一つには、我々の発想は、良くも悪くも時代を先取りしているということだろう。それも、かなり先を行っているので、社会がこれに追いつくのに相当の時間がかかっている。最近介護保険が行き詰って、住民の福祉力にも期待をかけるようになった。ところが、そのやり方は従来通りで、推進者主導で進めるものだから、住民が参加してこなくて困っている。やはり住民流を取り入れなければ駄目だということに気づく人も出て来ている。
「あなたの発想に、社会がようやく追いついてきましたね」と言ってくれる人がたくさんいる。
Ｃ　追いついてはきたけれど、住民流を実践するには、その下地となるものが欠けている。繰り返し言っているのだが、担い手主導・推進者主導がどうしても改まらない。担い手主導を当事者主導に切り替えるということは、当事者がいて、周りに助けを求めている「ご近所」という発想を取り入れなければならない。ところが関係者は、ご近所から最も遠い市町村域から一歩も出る気はない。この切り替えができるには、今の地域福祉推進のあり方を根本の所から転換しなければならない。それは無理だろうね。

まずはご近所福祉から手を付けよう

Ａ　ご近所福祉をやる気がある人たちと手を組んで、ここから従来の福祉を変えていこうとしているわけだ。確かにご近所福祉に取り組むということは、当事者主導・住民主導を実践することになるし、マップはここでつくる。そうすれば住民の営みが嫌でも目に入ってくる。それを応援しようという気も出てくる。民生委員も自らご近所に入って当事者に関わるのでなく、ご近所さんたちの助け合いをバックアップすればいいとわかってくる。
Ｂ　ご近所福祉から入るのは正解かもしれないね。

「自閉症」は太古の時代から なぜ生き残ったのか？

◆「障害者」でなく「マイノリティ」だった

英国で最も権威あるノンフィクション賞を受賞した「自閉症の世界～多様性に満ちた内面の真実」（スティーブ・シルバーマン著／正高信男・入口真夕子訳／講談社）は、ライターのシルバーマン氏が、「自閉症とは何か」という根源的な疑問に答えを出そうと、自閉症の歴史を徹底的に調べ上げたものだ。

その結果、彼はこの作品に「NeuroTribes」というタイトルをつけている。これは彼の造語だが、分かりやすく言い換えれば「神経学的マイノリティ（少数民族・少数派）」になるという。これこそが自閉症の本質であると、彼は結論付けたのだ。

これは先月取り上げた「ニューロダイバーシティ」（脳多様性）という考え方に基づいており、「ニューロダイバーシティ」を、彼はこう定義している。「自閉症、読み書き障害、注意欠陥／多動性障害（ＡＤＨＤ）のような状態は、技術と文化の発展に貢献するそれぞれ固有の強みを持つ、自然に起こる認知多様性とみなされるべきである」。

簡単に言えば、発達障害の人は、普通の人とは異なる知性を持ち、それは人類の技術と文化の発展に貢献するために、自然に発生した多様性であるということだ。

◆通常の知能テストでは彼らの可能性は測れない

自閉症についてはこれまで、脳科学の研究により、普通の人とは異なる脳の場所や仕組みによって情報を処理していることが判明しているし、自閉症の人の知性は、普通の人に合わせて作られた知能検査では測ることができない―つまり私たちとは異なるタイプの知性を持っていることもはっきりしている。

医療の世界では自閉症の人は「高機能」と「低機能」に分類され、後者は知的障害を伴うため「明らかに障害者」とされている。しかし、ハーバード大学の研究者イザベラ・ソーリエール氏は、知的障害を伴う自閉症児のための学校で「レーヴン・テスト」（イメージのパターン分析力を使った、ほとんど言語を使用しない知能テスト）を実施したところ、ほぼ半数の子どもが一般的な知能の範囲内に入っていた。

「これらの子供たちに、さらに異なる知能テストを実施すれば、彼らの隠れた可能性がさらに明らかになるでしょう。彼らの知性に適した素材を提供することさえできれば、彼らは非常に複雑な問題も解くことができるのです」。

サイエンティフィック・アメリカン誌でこのニュースを取り上げたライターのローズ・エヴェレス氏は、この結果は個人的経験からも容易に納得できるという。彼女には、成人した今も自分の名前さえ書くことができない、自閉症を持つ弟のアレックスさんがいるが、彼女が小学５年生の時に、アレックスさんは彼女の宿題の間違いを指摘してくれるようになったという。その時、アレックスさんはなんと幼稚園児だったが、彼女が解いた算数などの問題を見ては、どれが間違っているかを教えてくれたため、彼女はいつも高い点数をとることができたということである。

実はエヴェレス氏には自閉症の弟が２人いるが、彼女が強く感じたのは、「学校の先生が彼らに求めること」と、「彼らができること」が、あまりに異なっているということだった。言い換えれば、前者は「普通の人ができること」であり、後者は「自閉症の人ができること」である。この２つ

は、まったく異なるものであり、自閉症の人の能力を研究する学者たちは、だからこそ、私たちは互いに補い合える存在なのであり、役割分担をして協力することで、社会の発展の可能性を拡げていくことができるのだと訴えている。

◆普通の人と自閉症の人の違いとは？

　では、普通の人の資質と、自閉症の人の資質はどのように異なるのか。代表的な違いを５つ選び、分かりやすく比較してみた。（もちろん、すべての特徴がすべての人に当てはまるわけではない）

①普通の人の興味は、まず人間に向かう

→会話やコミュニケーションを重視し、コミュニティや社会をつくる。

**　自閉症の人の興味は、宇宙や数字、システムや技術に向かう**

→それらの仕組みを理解したいという根源的な欲求を持ち、観察・記録したり、計算したり、理論を生み出そうとする。動物とも特別なつながりを持つ。

②普通の人は、大まかに全体を見る

→物事の全体像を把握することができる。

**　自閉症の人は、まず細部を見て、それから全体を構築していく**

→重要な細部を見逃さず、正確性が高い。科学的な観察ができる。

③普通の人は、直感的に、感情を通して思考する

→「心で考える」ことができ、状況に応じて配慮ができる。

**　自閉症の人は、直感や感情を介さず、論理的に思考する**

→感情に左右されず、論理的な判断ができる。

④普通の人は、主に言葉を使って思考する

→言葉で学び、記憶し、コミュニケーションできる。

**　自閉症の人は、主に映像を使って思考する**

→見たものを画像や映像で細部まで記憶し、再生できる。図形の展開図をイメージしたりするのも得意で、脳の中で物体を自由に回転させたり、脳の中

で何かを設計したり、設計した機械を脳内で動かしたりできる場合も。

⑤普通の人は、他人の気持ちを読み、それに合わせようとする。他人や社会に認められたいという欲求を持ち、流行を気にする

→他人の気持ちを理解し、一緒に行動したり、協働することが得意。褒められたい、成功したいという欲求が行動の原動力になる。

自閉症の人は、他人の気持ちを読むことが苦手で、他人や社会にどう思われるかを気にしないので、教師の支持にも無条件に従わないし、流行も興味がない

→まわりに影響を受けることなく、独自の考え方を独自のやり方で追求することができるので、誰も思いつかないことを発見できる。

こう並べてみると、いずれの資質も、ここに挙げたようにプラスの要素になる一方で、引っくり返せば当然マイナスにもなるものであり、それは「普通の人」でも「自閉症の人」でも全く変わりないのだ。

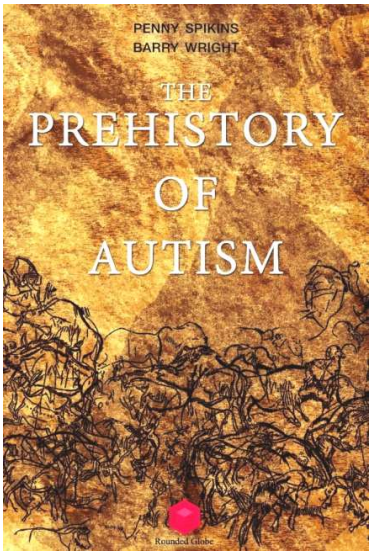
だから私たちがつい自閉症の人の「できないこと」に目がいってしまうように、自閉症の人から見れば、普通の人は、いつも他人がどう思うかを気にする神経症的なところがあり、無駄におしゃべりばかりして、物事を漠然としか見られず、注意力が散漫で一つのことに集中できないなど、理解しがたい存在なのである。だが幸いにも私たちは多数派であり、社会のシステムや慣習はこちらに合わせてつくられているので生活に支障が出ることはなく、「障害者」というレッテルを貼られずに済んでいる。

今ではこのように、自閉症の人は「マイノリティ」（少数派）だから社会に適応できないだけだという見方をとる人が、日本の医療の専門家にも出てきている。

◆数学や科学の進歩に自閉症が貢献

宇宙ロケットやコンピューターといった革新的な技術が、前項の「普通の人」の資質ではなく、「自閉症の人」の資質から生まれたものであるこ

とを疑う人は少ないだろう。過去、科学技術などの分野で重要な功績を残した人たちには、自閉症の資質を備えた人たちが非常に多いことはよく知られている。彼らが社会から「変人」として嘲笑されながら、その社会のために多くを生み出してきたことは、シルバーマン氏の著作を読めばよく分かる。



そして最近のＤＮＡの研究によって、自閉症に関わる遺伝子は、我々が類人猿の頃から存在し続け、人を人たらしめてきたものの一部であることが分かってきた。類人猿から人間の祖先へと枝分かれした時にも、わざわざ持ち越されたものなのだ。現在の自閉症の人の数を見ても（アメリカではユダヤ人の数と同じぐらい）、これは偶然や病気とは考えられず、人類として進化する中で、生き残りにプラスになる遺伝子として確実に選択されて残されてきたものだという（Independent）。

そして考古学の分野では、ヨーク大学の上級講師ペニー・スピキンス博士によれば、「最近の研究により、自閉症を持つ私たちの祖先は、人類の進化史を通じて、その独特の能力や才能により、社会グループの中で重要な役割を果たしていたと考えられる」という。たとえば天体観測やそれによる暦の発達、火などの革新的な技術を生み出すこと、数学や科学の専門家の誕生―そうしたことに自閉症的な資質が大きく関わっているのではないかということだ（「自閉症の先史学」）。

◆普通の人と自閉症の人はグラデーション

確かに、「天体観測とそれによる暦の発達」を考えてみても、まさに自閉症の人を連想させる。彼らは生まれつき宇宙や自然の構造を理解することに強い欲求を持ち、興味のあるものを徹底的に観察して数字などで記録

写真：スピキンス博士がヨーク大学のバリー・ライト教授（児童精神保健が専門）と共著した「自閉症の先史学」

することにこだわりを持っていたり、カレンダーを憶えたり、カレンダー計算ができる人たちがよくいる。自閉症を専門に研究するある学者は、冗談交じりにこう述べている。「もし自閉症の資質を持つ人がいなかったら、私たち人類はいまだに洞窟の中で輪になっておしゃべりをしていたでしょう」。

そしてこれこそが、冒頭で下線を引いて示した「ニューロダイバーシティ」の定義、「技術と文化の発展に貢献するそれぞれ固有の強みを持つ、自然に起こる認知多様性」ということなのだ。

ちなみに古代の洞窟壁画にも、現代の自閉症の人が描くように、複雑な線を重ねて細部まで写実的に動物が再現されているものがあり、「自閉症の人が描いたものではないか」という議論が長年続いているということだ（「自閉症の先史学」）。

誤解のないように言えば、「自閉症の資質を持つ人」というのは、必ずしも「自閉症の診断を受けた人」という意味ではない。「自閉症の人」と「普通の人」はグラデーション状につながっており、どこかで明確に線を引いて分けることはできないという見方が今は一般的になった。世界的に有名な自閉症研究センターを有するケンブリッジ大学が発行する記事には、こう書かれている。「自閉症的な性質を持っていることと、自閉症と診断されることは同じではありません。自閉症的な資質というのは、自閉症の臨床診断に関わるものであると同時に、世間一般の人たちにも広く共有されているものなのです」。要は、「私はどのくらい自閉症的か」というだけのことであり、こういうグラデーションとしての考え方は、サイコパスの専門家も取り入れるなど、一つの流れになりつつあるのかもしれない。

◆創造性は「制御された脳」では発揮できない

「障害ではなく、人類の発展に貢献するために生まれた認知多様性である」という考え方は、冒頭のニューロダイバーシティの定義で示されているように、自閉症の限らず、発達障害全般について適用されるものである

が、やはり注意欠陥／多動性障害（ＡＤＨＤ）についても、新しい研究成果によって説得力が生まれている。

創造力と知性の研究で有名なスコット・バリー・カーフマン氏によれば、これまでにも、創造的（クリエイティブ）な人の性質を分析して羅列していくと、ＡＤＨＤ的な資質と大きく重なることが指摘されてきたが、最近の脳科学などの研究成果によって、ＡＤＨＤは「創造力」と深い関係にあることが証明されているという。

たとえば、現実社会で創造的な仕事を成し遂げる能力には、幅広い対象に同時に注意を向ける才能や、脳のフィルターが緩いといった資質が関係していることが分かったが、これはＡＤＨＤの代表的な資質だ（通常はマイナス面として捉えられているが）。

また、創造的に考えることができる人とＡＤＨＤの人に共通しているのは、脳の中の「イマジネーション・ネットワーク」と呼ばれる部分で行われる脳の活動を抑制しない（抑制できない）ことだという。

ＡＤＨＤの人が制御することが苦手な脳のネットワークは、ジャズやラップなどのミュージシャンが即興演奏などに使うのと同じ脳のネットワークであることも分かっており、湧き出るように、次から次へと音楽や詩を生み出すことは、しっかり制御された脳ではできないということなのだ（Scientific American）。

「制御しない脳」が生み出すアイデアの泉を生かして起業家として成功する人が多いのも有名な話で、日本では楽天の三木谷社長も、氏の半生を描いた書籍「ファースト・ペンギン」（大西康之／日本経済新聞出版社）の中で、「他の人と違う。ＡＤＨＤの傾向があるかもしれない」と自己診断しているが、「頭の構造が、他の人とちょっと違う。それだけのことでしょ」。

授業中でもじっと座っていられないため、学校ではずっと落ちこぼれだったが、その制御できない脳を逆に生かしてビジネスで大成功した彼は、多岐にわたる話題をマシンガンのように次々と話し、周囲を置いてけぼりにするため、「まるで、頭の中に何本もの電車が走っているかのようだ」

と描写されている。それでいて、ここ一番という時の集中力はすさまじく、問題を一挙に解決していくのだと（これも「レーザーのような集中力」などと呼ばれているＡＤＨＤの特質だ）。

この本のタイトルの意味が興味深い。魚を求めて、群れから飛び出て最初に海へ飛び込んだペンギンという意味で、安定を求めずにハイリスクを冒してでも道を開拓していくというＡＤＨＤらしい彼の生き方を表したものなのだと（ＮＥＷＳポストセブン）。

そして、まさにこうしたＡＤＨＤの資質―複数の対象に同時に関心を払える「分散型の集中力」、湧き出るような創造力、興味の対象を見つけた時のレーザーのような集中力と問題解決力、決まったやり方を嫌い、常に新しいやり方や新しい活動を模索したり、新天地を恐れず果敢に飛び込んでいく開拓精神―が、やはり人類史において、重要な役割を果たしてきたと考える専門家は少なくないのだ。

社会が発展し、いろいろな意味で定型化した現代では、「普通」と異なる資質を生かして役割分担をするということがしにくくなり、障害という見え方に偏りがちなのかもしれない。

だがこう見てくると、人類史というのは「普通の人」だけで築いてきたものでは決してなく、様々な資質を持つ人たちが、それぞれのユニークな特徴を生かしてダイナミックに貢献し合うことで創造的に発展してきたであろうことが想像できるようになる。

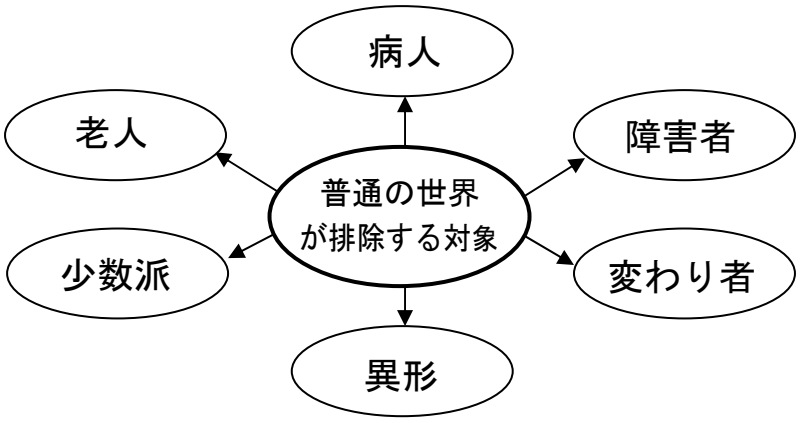
いま私たちが考えるべきことの一つは、「普通」と異なる能力ほど、私たちには思いもつかないことを成し遂げてくれる可能性を秘めているのであり、たとえば自閉症的な資質が非常に強い子供を、不遜にも「低機能」などと決めつけるのではなく、私たちの創造力を駆使して、彼等に秘められた未知の能力をいかにして発掘して活用するかということかもしれない。

「自閉症の世界」が問いかけるもの

普通以外を排斥して成り立つ普通の世界
「福祉」の根源的な欠陥が見えてきた！

「現代精神医学を迷路に追い込んだ過剰診断」という書籍の新聞広告にこうあった。ー「人生のあらゆる不幸に診断名をつけるＤＳＭの罪」。新しい「症状」を見つけては、奇抜な病名をつけ、薬を処方する。見方によれば、精神科医というのは怖い存在である。

「自閉症の世界」が我々に突き付けたのは何か。図に示したように、社会は、自分たちを「普通の人」と規定し、普通以外の人たちを「劣った者」と決めつけ、社会から排除し、そしておもむろに「救済」の手を差し伸べる。それも、「普通」の側の価値観で「救済」しようとする。こうなると「救済」は実質的には「攻撃」に変身する。精神科医がやっていることは、これに類するとみていい。



福祉が本来すべきことは、「普通」絶対の立場から抜け出て、「普通」でない相手の側に立って、彼らの独特の生き方、その価値を見出し、それをどのように社会に生かしてもらうのかを考えることなのかもしれない。

「ご近所」から入って一石十鳥

住民流福祉-最も効率的な実践課題とは？

わが国に住民流福祉を普及させるには、とりあえずどんなテーマに取り組んだらいいのか。その重点目標が明らかになれば、これに全国の「（住民流福祉を実践している）同志」たちが歩調を合わせて取り組むことで、所期の目的を果たすことができる。

実際には住民流福祉のカバーする範囲は、福祉の全般にわたっているが、その中で、同志たちの多くが取り組んでいるテーマを重点目標にするのが順当だと思われる。その筆頭は「ご近所」だ。ご近所福祉に取り組むことで、住民流福祉の最も重要なテーマを網羅することができるのだ。

私たちがめざす当事者主導・住民主導の福祉はどうしたら効果的に実現することができるであろうか。私どもはその最も手近な方法、しかもベストの方法として「ご近所福祉」を考えた。

ご近所での福祉は、何よりも当事者の意向を最優先するからこそ考えられた。それがそのまま当事者主導の福祉の実現、そして住民（ご近所）主導の（助け合い型）福祉の実現なのだから、ご近所福祉を普及させることで、当事者主導・住民主導への流れを作り出すことができる。

これを後押しするのが支え合いマップ作りである。支え合いマップを作れば、そこにご近所というものが存在すること、当事者が主導して福祉が営まれていること、世話焼きさんという住民が主導して福祉が実践されていること、しかも住民流が実際に存在することも理解できる。

そこで支え合いマップ→ご近所福祉→当事者主導→住民主導→住民流福祉を一つながりのものとして広く社会に周知することができる。「ご近所福祉」を推進するために取り組むべきことは、以下のとおりである。

⑴「ご近所」の存在をアピールする。

①平均５０世帯で人々は寄り集まっている。

②ここが「顔が見える範囲」である。

③地域で唯一「助け合い」が可能な圏域である。

④したがって、地域福祉はご近所福祉から始まるべきこと。

⑵支え合いマップでご近所の助け合いの実態を明らかにする。

①マップ作りはご近所（およそ５０世帯）ごとに実施すべきこと。

②ご近所さんたちで主体的にマップ作りをすること。町内会等は支援役。

③ケアマネジャーや生活支援コーディネーターもご近所でのマップ作りに参加する。

⑶効率的なマップ作りや研修のあり方を工夫する。

①研修法として寸劇を開発したが、それよりもさらに効果のある方法を開発する。

②もっと効果的なマップ作りの方法を開発する。

③マップ作りを普及させるため「マップ情報センター」を作るのはどうか。

⑷ご近所の問題はご近所さんたちで取り組もう。

①マップで出てきた取り組み課題はできる限りご近所さんの手で取り組むこと。

②ご近所内の世話焼きさんが主役で取り組むこと。
③ご近所さんによってご近所福祉推進体制を作る。

⑸自然な助け合いと意図的な組織活動を融合する。

①マップで出てきた自然な助け合いだけでは福祉力に限界がある。
②そこで意図的、組織的な活動を取り入れることでご近所の福祉力を強化させる。
③そのために住民の自然な活動が委縮しないようにする工夫が求められる。

⑹ご近所福祉では特に天性主義で人材登用を。

①ご近所福祉に限らず、人材登用を天性主義に転換する。
②これまで自治会長等による委嘱が通例となっていたものを変えられるか。
③世話焼きは概して第四層のみに分布しているが、他の層でも天性主義で人材登用を。

⑺民生委員や町内会はフォワードからミッドフィルダーへ。

①今は民生委員も町内会も、直接ご近所に関わるのが常だが、ご近所支援役に切り替える。
②町内会も町内としての活動よりも、ご近所毎に取り組むのを支援する役に下がる。
③民生委員もハブ役を期待されるようになった。ミッドフィルダーという認識を広げよう。

⑻ご近所発の地域福祉へ、各層がご近所に結集。

①関係者は第一、二層からの「トップダウン」方式だが、ボトムアップに切り替える。

②ケアマネジャー、生活支援コーディネーターも、ご近所のマップ作りから始める。

⑼新しいご近所型福祉（サービス・施設）を模索へ。

①これからは地域密着はご近所密着に、施設やサービスもご近所限定に切り替える。

②施設と地域はご近所で一体化する可能性も。サービスと助け合いも同様。

⑽「助けられ上手型自助」を柱とした福祉へ。

①当事者主導ならば当事者の自己責任が求められる。自己完結型自助から助けられ上手へ。

②自己開示を強く迫る。認知症を隠さない町作り。プライバシー放棄宣言。

③助けられ上手講座をさらに普及。住民向け各種講座に助けられを盛り込む。

④爆発する自助グループへの関わりを始める。まずは情報センターから。

■「住民流福祉」を追究する同志のつながり

住民流福祉（支え合いマップ）ネットワークを立上げへ
－９月２９日に発起人会を開催

このたび住民流福祉に理解と関心を持つ方々によるネットワークを立ち上げることになった。そのための発起人会を９月２９日に本研究所（埼玉）で開催する。これには、有志１０名余が全国から駆け付けてくれる。

とりあえずは設立大会を開くことになるが、その前に有志たちでネットワークのあり方や活動内容について話し合う。以下は、最新の趣意書（案）である。この案を下地にして、これからの活動や組織のあり方を協議する。

■趣旨

私・木原孝久が、住民流福祉の存在を確認して以来、数十年にわたってその構造と発展拡大策の解明を急いできた。最近ようやく、その作業が一段落したこの機会に、住民流に理解を示し、一部で実践を始めている方々によってネットワークを作り、この理論のさらなる深化と具体的実践、そして全国への普及をめざして、連帯して行動を開始していただくことになった。

これまで、公私の機関を含めて住民流福祉に関心を持つ関係者は多いとは言えなかったが、それでも、助けられ上手、ご近所福祉、世話焼きさん、支え合いマップなど、部分的に住民流福祉を取れ入れる人たちも現れてきた。

その後介護保険が行き詰まり、「要支援」への対応で住民パワーへの期待が膨らんできた。それだけでなく昨今の超高齢化、認知症等の要介護者の急増などで、地域の福祉力を早急に増強しなければならなくなった。その柱になるべきは住民だ。住民には住民なりの流儀がある。それに従わなければ住民を味方に取り込むことはできないという点に、一部の関係者も気づき始めた。住民流福祉が今後広がっていく素地はできつつある。

この時期に、他の関係者に先駆けて住民流福祉の有効性にいち早く気付き、実践を始めた人たちがネットワークによって交流し、情報やノウハウを交換し、さらなる一歩を踏み出していくことで、これに追随する人たちの水先案内人になっていくことが期待される。

■ネットワークと活動

⑴「住民流福祉ネットワーク・〇〇」の立上げと会員登録

①全国各地に、有志によって、その地名を付けた「住民流福祉（支え合いマップ）ネットワーク・〇〇（都道府県市町村名）」を立ち上げる。
②「ネット〇〇」は住民流福祉に理解を示し、賛同する個人の緩やかな集合体とする。
③会員にはメールアドレスを登録してもらい、ニュースレターなど、会員向けの情報などが送付される。

⑵ブロック制の導入

①ネットワークは、全国ネットとブロック制の二本立てとする。
②まず全国をいくつかのブロックに分け、ブロックごとにまとまる。ブロック内の特定の有志会員が代表・事務局を担って、ブロック内を取りまとめる。交流事業等はまず各ブロック内で実践し、必要に応じて全国ネットを通して、域外の会員との交流も可能にする。会員登録もまずブロック単位とし、その後名簿を全国ネットの事務局へも伝達する。
③各ブロックの代表者たちで「ブロック代表者会議」を開催する。他のブロックと協議が必要になった時に、随時開催する。むろん電話やメールによる「会議」がメインになる。今の段階では、北海道・東北ブロック、北陸ブロック、関東ブロック、近畿・東海ブロック、中国・四国ブロック、九州ブロックとなる。会員の分布状況によっては、さらに細分化されることもある。
④代表者会議や各ブロックの事務局の体制づくりと活動が軌道に乗るまでは、新しい取り組みの提案、相互交流の仲介、住民流福祉の新理論や、実践ノウハウづくりなどは、「住民流福祉総合研究所」が従来通り担っていく。

⑶共同事業と交流事業

①ネットワークは、会員の希望が実現できるような活動・事業を進めていく。自分の所だけではできないことを他の会員の手助けで実行するなど。

②住民流の理論は多岐にわたっているので、会員の多くは、その中のどれかに研究・実践の対象を絞っているが、同じテーマに取り組んでいる会員同士で、共同研究や実践をすることもできる。

③他の会員を講師や指導者として招聘することもできる。

④特定のイベントを共同で開催することもできる。

⑤独自に開発した住民流福祉の活動のノウハウをまとめて、他の会員に提供したり、レクチャーのために訪問することもできる。また全国ネットを通して、会員全員に伝えることもできる。

⑥ご近所福祉活動発表大会、マップづくり研究大会のようなイベントを、各ブロックで一斉に開催する。

⑦住民流福祉の勉強会や講演会、研修会をブロック内やブロックを越えて開催する。開催ノウハウを他の会員やブロックにも提供する。

⑧住民流の発想を普及させるための啓発活動もブロックごと、全国段階の双方で実践していく。啓発用資材を会員間で融通し合う。

⑨住民流福祉総合研究所はこれらの活動が効果的に実践されるよう便宜を図る。その後各ブロックや代表者会議でもできるところから担っていく。同研究所の担うことはその他、新しい理論と実践法の開発と会員への伝達、住民流の各種の実践方法を、有志会員との共同事業で開発し、各会員にも伝えていく。住民流福祉関連の各種小冊子などの改訂やニュースレターの送付など。

研究所からのお知らせ

■今後はウェブマガジン「夢通信」へ移行

本号をもって月刊誌「住民流福祉」は終了となりますが、今後は本研究所ホームページにてウェブマガジン「夢通信」として、新しい発想や実践をご紹介していきたいと思います。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

■冊子「ご近所福祉を強める法」が完成

地域の福祉力を強化するには、まずもって要援護者に直接かかわるご近所の福祉力の強化から始めなければなりません。そこで、本格的なご近所福祉をめざすために、自然発生の助け合いを生かしつつ、更に強固なご近所福祉体制を意図的組織的に作っていく方法をまとめた冊子「ご近所福祉を強める法」を作成しました。近日、本研究所ホームページの資料・図書一覧で公開予定です。

■横浜市管内の社協職員たちでマップの勉強会を立ち上げ

横浜市管内の社協職員たちが、本研究所の協力でマップの自主勉強会を立ち上げました。すでに第一回を終え、現在第二回目を計画中です。支え合いマップづくりに行き詰まりが生じたものの、一回二回講義を受けただけでは行き詰まりは解消しないということがわかったので、この際、お互いが納得できるまで様々な角度から勉強しようということで、立ち上げに至りました。

■鹿屋市社協が独自の寸劇シナリオを作成

本研究所が開発した、マップ学習用の寸劇シナリオが各地で好評をいただいていますが、鹿児島県では、鹿屋市社協が県社協、住民と協力して、マップづくりで出てきた事実に基づき独自の寸劇シナリオを作成、セミナーで上演しました。これは、全国で初めての取り組みです。